

学生の思考を深化させるための フィジカルアセスメント教育の検討

山田 巧[†]第66回国立病院総合医学会
(平成24年11月16日 於神戸)

IRYO Vol. 68 No. 2 (76-80) 2014

要旨

【目的】実習指導者が看護学生に展開しているフィジカルアセスメント教育の実態を明らかにするために、フィジカルアセスメントに関する指導内容と指導方法を抽出した。【方法】独立行政法人国立病院機構本部九州ブロック事務所が主催した平成23年度実習指導者講習会に参加した研修生40名を対象とした。“呼吸器系のフィジカルアセスメント場面”の事例を提示し、“何をどのように指導していくか”を質問紙に記載してもらい、その記載内容から指導内容と指導方法を抽出した。【結果】35名から回答が得られた(回収率87.5%)。実習指導者はフィジカルイグザミネーションの実施前に学生の「フィジカルアセスメントに必要な解剖生理や患者の疾患の病態に関する知識」といった指導内容を「発問・質問」(→81pを参照)という指導方法を用いて確認していた。また、学生がフィジカルイグザミネーションを実施している状況では、「発問・質問」という指導方法より、「観察」「演示」という指導方法を用いていた。フィジカルイグザミネーション実施後は、学生の報告を受け、観察内容やアセスメントの不足部分を「発問・質問」し助言していた。ただし、学生がフィジカルアセスメントする場面を「観察」しておらず、学生の報告内容を鵜呑みにして、それをもとに指導していた。【考察】学生の思考を深化させるためのフィジカルアセスメント教育の基本は、実習指導者自らがフィジカルイグザミネーションに参画し、学生が医学的な根拠のもとにフィジカルイグザミネーション技術を正確に展開できているか、学生の実施場面を「観察」し、そして、必要時「演示」してみせる直接的な指導方法が効果的である。

キーワード フィジカルアセスメント, 臨地実習, 看護学生, 実習指導者, 指導方法

はじめに

わが国の看護教育において、フィジカルアセスメントスキルの強化は重要な課題となっている。平成

19年4月に厚生労働省から出された「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」¹⁾においても、フィジカルアセスメントを強化する内容をカリキュラムに組み入れるよう提言がなされている。

東京医療保健大学 東が丘看護学部総合看護学領域 准教授 †教員
別刷請求先：山田 巧 東京医療保健大学 東が丘看護学部総合看護学領域 〒152-8558 東京都目黒区東が丘2-5-1
e-mail: t-yamada@thcu.ac.jp

(平成25年3月11日受付, 平成25年11月1日受理)

Physical Assessment Education for Making A Student's Thinking Enhance
Takumi Yamada, Tokyo Healthcare University Faculty of Nursing at Higashigaoka

Key Words: physical assessment, clinical practice, nurse student, clinical instructor, educational methods

しかし、学生に教育をする立場にある看護教員はフィジカルアセスメント教育に自信をもてず模索しながらフィジカルアセスメント教育をしている実態があり²⁾、フィジカルアセスメントの教育目標の設定、基礎看護学領域でのフィジカルアセスメント教育内容の理解といったフィジカルアセスメント教育に関する学習ニーズを抱いている³⁾⁻⁷⁾。

フィジカルアセスメントは、健康歴の聴取(問診)をはじめ、視診・聴診・触診・打診といった技術を用いて系統的に頭部から足先までの全身の状態を的確に把握し、身体的側面から身体健康レベルを査定することである。看護師はこれまでも患者の一般状態を把握する方法として、「バイタルサイン測定」という名のもとにフィジカルアセスメントを実施してきた。それにもかかわらず、看護師はフィジカルアセスメントについて、看護に新しく入ってきたものと戸惑いを感じ、フィジカルアセスメントに関する教育の必要性を感じ⁸⁾、より具体的なフィジカルアセスメントができるような教育や研修を求めている⁹⁾。

このような状況の中、フィジカルアセスメントの実施の場である臨地実習において、教師役である実習指導者が学生にどのような指導内容と指導方法をもってフィジカルアセスメント教育をしているのか、具体的に検討した研究はみられない。

研究目的

実習指導者が看護学生に展開しているフィジカルアセスメント教育の実態を明らかにするために、フィジカルアセスメントに関する指導内容と指導方法を抽出する。

研究方法

1. 対象者：独立行政法人国立病院機構本部九州ブロック事務所が主催した平成23年度実習指導者講習会に参加した研修生40名
2. 調査内容：「呼吸器系のフィジカルアセスメントの指導場面」の事例を提示し、実習指導者としてどのように指導を展開していくか質問紙に記載してもらった。

(事例)

「肺気腫の患者を受け持ちとする看護学生3年生(3年課程)に対し、呼吸器系のフィジカル

アセスメントについて、学生に指導しようと思っています。あなたは、普段どのように指導していますか。お書きください。」

3. 分析方法：質的帰納的分析を行った。対象者が記述したもとのから、指導方法や指導内容をコード化し、類似した意味内容のコードからカテゴリー化した。
4. 倫理的配慮：研究協力はいくまでも任意であること、プライバシーの保護に関しては、質問紙に個人や施設名が特定される項目を設けていないこと、データの取り扱いに関しては個人情報保護に十分配慮することを記載した趣意書を質問紙に添え配布した。研究者が趣意書を読み上げ、口頭での説明を加えた。質問紙の回収は、研究者の目の届かない場所に回収箱を設置し、そこに投函してもらう方法を取り、投函をもって研究への協力の意思があるものとみなした。

なお、本研究は平成22年に福岡女学院看護大学(著者の前職)にて倫理委員会の承認を受けて行った。

結果(表1)

1. 研究協力者：35名(回収率87.5%)
2. フィジカルアセスメントの指導内容(N=35)
 - 1) フィジカルイグザミネーション実施前の指導内容。()内は人数

肺気腫の病態(9)、肺気腫の観察点(5)、呼吸の観察方法(4)、聴診部位(3)、呼吸音聴診の必要性(2)、肺気腫の呼吸音(2)、前日の実施の振り返り(1)、肺気腫のX線所見(1)、過去の呼吸音聴診の経験(1)、以上について学生の理解度や実施予定の観察内容、過去の経験を確認していた。
 - 2) フィジカルイグザミネーション実施中の指導内容

「呼吸音、回数、深さ、普段との違い」について、学生の観察結果とアセスメント内容を確認していた。ただし、1名のみのお返答であった。
 - 3) フィジカルイグザミネーション実施後の指導内容

観察内容の報告(13)、観察後のアセスメント(13)、観察の不足点(8)、看護の必要性(5)、肺気腫の病態のアセスメント(2)、病態・症状と画像所見や検査所見の関連(2)、聴診の

表1 フィジカルイグザミネーション実施前・中・後の指導内容と指導方法

N=35	実施前	実施中	実施後
発問・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・肺気腫の病態 (9) * ・肺気腫の観察点 (5) * ・呼吸の観察方法 (4) ・聴診部位 (3) ・呼吸音聴診の必要性 (2) ・肺気腫の呼吸音 (2) * ・昨日の実施の振り返り (1) ・肺気腫のX線所見 (1) * ・過去の呼吸音聴診の経験 (1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・呼吸音, 回数, 深さ, 普段との違い (1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察内容の報告 (13) ・観察後のアセスメント (13) ・観察の不足点 (8) ・看護の必要性 (5) ・肺気腫の病態のアセスメント (2) ・病態・症状と画像所見や検査所見の関連 (2) ・聴診の実施の確認 (1)
観察		<ul style="list-style-type: none"> ・一連の流れ (12) ・聴診の方法 (1) 	
演示	<ul style="list-style-type: none"> ・学生同士またはスタッフの聴診 (1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に実施 (17) 	
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で先に患者を聴診し自分でまずアセスメント (1) 		<ul style="list-style-type: none"> ・学生と自分が聴診・観察したことを照合する (2)

() 内は人数

* 肺気腫に関連した内容

実施の確認 (1), 以上について学生の観察結果やアセスメント内容を確認していた。

3. フィジカルアセスメントの指導方法 (N=35)

1) フィジカルイグザミネーション実施前の指導方法

「発問・質問」という指導方法で学生の理解度や実施予定の観察内容, 過去の経験を確認していた。また, 患者に実施する前に学生同士や実習指導者自らの胸部で聴診させてみるなどの指導方法をとっている実習指導者が1名いた。

2) フィジカルイグザミネーション実施中の指導方法

ベッドサイドでは, 患者に配慮してか, 実施前・後と比べ学生に「発問・質問」をする実習指導者は少なかった。また, 一緒に聴診を行い「演示」してみせている実習指導者は17名 (48.6%) と半数以下であった。学生の実施を「観察」しているのみで「演示」してみせない実習指導者は8名 (22.9%) いた。

3) フィジカルイグザミネーション実施後の指導方法

フィジカルイグザミネーション実施後は, 学生の報告を受け, 観察内容やアセスメントの不足部分を「発問・質問」し助言していた。ただし, 学生がフィジカルアセスメントする場面を「観察」しておらず, 学生の報告内容を鵜呑みにして, それをもとに指導している実習指導者が多かった。一方, 実習指導者自らがフィジカルアセスメントし, 学生の報告内容と照合しながら指導している実習指導者も2名いた。

考 察

フィジカルアセスメント教育では, 医学的な根拠に基づいた知識や技術を学生が持ち合わせているか確認する指導が不可欠である。実習指導者が「発問・質問」という指導方法を用いることで, 学生は疾患や病態から予測される症状や徴候を予測し, 何を観察しなければならないのか, そのためにどのよ

うなフィジカルイグザミネーションをしなければならぬのか思考をめぐらすことにつながる。このように、フィジカルイグザミネーションの実施前・中・後それぞれの段階で「発問・質問」という指導方法を用いることが効果的であるといえる。

学生のフィジカルイグザミネーションの実施場面を観察していない実習指導者が少なくないことが明らかになった。フィジカルアセスメントには正確なフィジカルイグザミネーション技術が不可欠である。実習開始の早い段階で、実習指導者は学生のフィジカルイグザミネーション技術を「観察」し、学生の観察やフィジカルイグザミネーション技術の根拠を「発問・質問」により確認する指導方法が必要である。そして、正確なフィジカルイグザミネーション技術が習得できるように実習指導者が自ら「演示」してみせる指導方法が効果的といえる。

実習指導者による事前診断（学生がフィジカルアセスメントのための知識や技術を持ち合わせているかの確認）→実施中の観察・指導→事後評価（フィジカルアセスメントの報告や記録が病態と関連付けてなされているかの確認）といった、「指導の連続性」を意識しながら学生に指導している実習指導者が少なく、場当たりの指導となっていた。このことは、佐藤ら³⁾が述べているように、「看護師自身がフィジカルイグザミネーションやフィジカルアセスメントについて自信をもって実践できていない現状がある」ことがその背景にあることが考えられる。

実習指導者自らがフィジカルイグザミネーションに参画し、学生が医学的な根拠のもとにフィジカルイグザミネーションが正確に展開できているか、学生の実施場面を「観察」し、そして、必要時「演示」してみせる直接的な指導方法が学生の思考を深化させる効果的な教育方法といえる。

本研究は、呼吸器系のフィジカルアセスメントの指導場面に限定し、実習指導者が普段行っている看護学生への指導内容と指導方法を抽出した。一般化するには限界がある。今後は、他の器官系統のフィジカルアセスメントに広げ、実習指導者が展開している指導について器官系統ごとに特徴があるのかさらに研究を進めていきたい。

結 論

実習指導者が看護学生に展開しているフィジカルアセスメント教育の実態を明らかにするために、フ

ィジカルアセスメントに関する指導内容と指導方法を抽出した。その結果、以下の結論に至った。

1. 実習指導者は学生の「フィジカルアセスメントに必要な解剖生理や患者の疾患の病態に関する知識」といった指導内容を「発問・質問」という指導方法を用いて確認していた。
2. 指導のタイミングをみると、フィジカルイグザミネーションの実施前と実施後に「発問・質問」の指導方法をとっており、学生がフィジカルイグザミネーションを実施している状況では、「発問・質問」という指導方法はほとんどとられず、「観察」「演示」という指導方法を用いていた。
3. 学生と一緒にフィジカルイグザミネーションを「演示」という指導方法を用いて指導している実習指導者は17名（48.6%）と半数に満たなかった。学生がフィジカルアセスメントする場面を実習指導者は「観察」していないことも多く、フィジカルイグザミネーション実施後、学生の報告内容を鵜呑みにして、それをもとに「発問・質問」を行い指導している実態が明らかになった。
4. 学生の思考を深化させるためのフィジカルアセスメント教育の基本は、実習指導者自らがフィジカルイグザミネーションに参画し、学生が医学的な根拠のもとにフィジカルイグザミネーション技術を正確に展開できているか、学生の実施場面を「観察」し、そして、必要時「演示」してみせる直接的な指導方法が効果的である。

謝辞：本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました独立行政法人国立病院機構本部九州ブロック事務所が主催した平成23年度実習指導者講習会に参加した研修生の皆様に心より感謝申し上げます。

〈本論文は第66回国立病院総合医学会シンポジウム「学生の思考を育てる」において「学生の思考を深化させるためのフィジカルアセスメント教育」として発表した内容に加筆したものである。〉

【文献】

- 1) 「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」, 厚生労働省, 平成19年4月16日
- 2) 篠崎恵美子, 藤井徹也, 上田ゆみ子ほか, 日本の

- 看護師のフィジカルアセスメントに関する認識.
医と生物 2011 ; 155 : 785-9.
- 3) 佐藤富美子. 看護大学教員・看護師を対象とした
フィジカルアセスメント教育の効果. 東北大保健
紀 2012 ; 21 : 25-32.
- 4) 長戸康和, 春木康男, 久住孝ほか. 胸部フィジカ
ルアセスメントの教育教材としての精密胸部断層
モデルの有用性. 医と生物 2011 ; 155 : 802-8.
- 5) 長戸康和. 胸部の立体構造を学ぶための断層レブ
リカの開発. 医と生物 2007 ; 151 : 200-5.
- 6) 竹内貴子, 前田節子, 桂川純子ほか. 看護過程と
連動させたフィジカルアセスメント教授方略の展
開-フィジカルアセスメント情報を看護情報として
活用する-. 日赤豊田看大紀 2011 ; 6 : 55-64.
- 7) 奥野信行, 大納庸子, 松本珠美ほか. フィジカル
アセスメント教育におけるブレンディッド・ラー
ニングの実践と評価. 園田学園女大論集 2010 ;
44 : 91-110.
- 8) 大沢たか子, 三浦かず子, 谷愛ほか. A 県内の臨
床看護師のフィジカルアセスメント技術に関する
現状調査. 高知学園短大紀 2012 ; 42, 99-112.
- 9) 篠崎恵美子, 山内豊明. 臨床の看護実践家が求め
る基礎教育でのフィジカルアセスメント教育-呼吸
に焦点をあてて-. 医と生物 2013 ; 157 : 444-9.